

## 花の都は豚の天国だった！ 豚の殺人もあつた中世パリ

「花の都」と謳われ「世界の都」と讃えられるパリ。

そのパリも、十二世紀はじめの中世紀ごろには市民の半数以上が自宅で豚を飼っていた。

当時のヨーロッパは、ドイツ最大の町ケルンでも人口わずか三万。

人口千人を超える町や村はドイツ全体でも百六十そこそこしかなかったというから、この時期、人口二十五万人を擁したパリは「ずばぬけた繁栄（？）ぶり」だった。

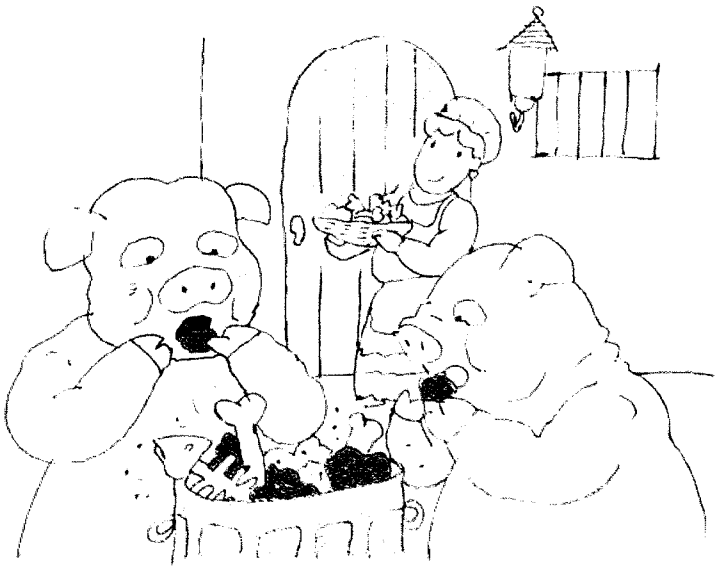
が、流通経済は未発達だったため、わが国の「手前みそ」よろしく、自前で豚を飼うのがそれこそ常識。

それもほとんどが市中での放し飼いだつたため、いまのインドで見られる牛と人間の共存のようには、人間の住むところか豚の町か、見分けがつかぬありさまだった。

当時、豚は市民のタンパク源として欠くべからざるものだったばかりか、生ゴミを入れるためのくずかごを備えた家もなかったため、豚はかつこうの掃除係。

それこそ「何でも」外に放り出しておく、そこらじゅうの豚が集まって来てきれいさっぱり掃除してくれた。

しかも、当時は食べものの残りをいかに多く出すか、出されるゴミがいかに多いかが「富



の象徴」とされていたから、家の外に積み上げられたゴミの山は言語に絶するほどだった。が、一二三一年のある日、思いがけない事件が起こつたのである。

当時、フランスに君臨していたカペー王朝の皇太子フィリップの一行が、馬に乗ってパリのグレイプ広場にさしかかったところ、突然一匹のメス豚が一行の前へ走り出て来て、皇太子の馬がこれにつまずいたのだった。

このはずみで皇太子はふり落とされ、路上にたたきつけられて翌朝死亡。

これに驚き慌てた王政府は、ただちに市中で豚を飼うことを禁止する法令を出したが、何しろ餌代もいらず、手間もかからぬこのお手前畜産、こっそり隠れて飼う者が後を絶たず、政府と市民のイタチごっこがこの後四百年も続いたのである。